A-1 山元町坂元中浜地区

2011年12月12日(月)

報告者名	高倉 浩樹	被調査者生年	1945年(男)
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	中浜神楽保存会
補助調査者	赤尾 智宏		

話者について

昭和20年7月28日に、山元町中浜で生まれた。66歳。家は農家であったが、不動産をやりたかったので、仙台で2年間建設会社に勤め、デベロッパーの仕事を学んだ。その後独立して、不動産会社をやった。遠刈田に仕事場。自宅は山元町中浜だったので車で通勤した。遠刈田で不動産事業をしていたのは別荘地ブームで仕事があったため。その後、会社を仙台に移した。

話者が、その後中浜神楽を担う親友会に入ったのは学校に通っていたときである。祭や神輿担ぎが途切れたことから、話者と話者の友人達は神輿を担ぎたいという思いがあった。神輿だけでなく、青年会がなくなったため、青年が集まる機会もほしいと感じていた。中浜に残った青年達を中心になって親友会が結成された。

現在、仮設住宅に母と二人で暮らしている。中山の仮設住宅地区には、神楽にたずさわっている人はいない。

被災後の中浜神楽の現状について

中浜神楽とは、中浜の浜の方のつまり坂元の南の地区で行われる神楽。この地域はすべての住宅が流出した。その結果、集会所に保管していた神楽の道具類も流出してしまった。現時点で、道具類は見つかっていない。

踊りの保存会のメンバーはばらばらになってしまった。残っている人はいない。地元から離れている人がどこにいったのか不明である。神楽をやるためには道具をそろえて、メンバーをそろえることから始まる。現在はやれるかどうかの見通しが立っていない。

中浜地区には300戸ほどの家があり、神楽が行われる天神社の祭典が最も大きい。保存会の30代の後継者には亡くなった人がいる。また、中浜地区から移動した人もいて、現況について話者は把握していない。天神社は津波の被害もなく残っているが屋根が傷んでいる。

中浜神楽保存会について

保存会は30年前ぐらいに関わり始めた。その頃はいろいろな地区で神楽が復興し始めた時期だった。

おおよそ35~40年前に青年の集いや青年文化会で郷土芸能を舞うようになり、他の地区から代表が集まり青年大会が催されていた。その時期に神楽が復興されるようになり、各地区の芸能が復活し始めた。中浜神楽が復活したのは同時期で、話者の青年時代である。中浜地区以外で

も神楽を踊り、競うようになった。教育委員会に登録する際に、「神楽保存会」という名称が決まった。保存会には青年である話者の世代は参加したが、自分たちより年上の先輩たち（古老）もいた。しかし彼らは保存会には入らなかった。とはいえ顧問とか指導は引き受けてくれた。

神楽を奉納したのは、天神社で、四月三日の祭典にあわせて奉納しながら踊ってきた。

『山元町史第一巻』（1971年刊）では、中浜神楽について「創始者は島田文三郎（現主竜平の父）で明治の末・大正初期は盛んだったが、一端断絶、その後、昭和42年6月中浜親友会（青年グループ）が発足し、活動を始めた」（要旨）と書かれていることを話者に尋ねる。すると、A氏は神楽を「おしえてはいるが、はじめたわけではない」と説明を加えた。さらにこの当時その孫が町史の編纂にかかわっていたので、その意見が反映されたのだろうという推察を述べた。

40数年前に神楽に携わる団体の名称が「保存会」と決まった。当時は地区の青年たちが踊っていた。自分たちより年上の世代では、青年会があり、そのなかに「神楽部」があった。彼らが明治期以降神楽を伝えてきた。

親友会について

自分が若い頃、祭の神輿を担ぐ人が祭に携わらなくなり、祭も神楽も行われていない時期が5～6年間あった。地区に青年はいたが、労働形態が農作業から「務め仕事」に変わるなどの社会情勢の変化から、祭だけでなく様々な行事も行われなくなった。

そのときに、「親友会」がたちあがった。青年会は、中学を卒業した長男のみが入会し、いくつかの「きまり」があり、厳しかった。親友会は、長男に限らず二男、三男、「務め仕事」の人でも誰でも参加できた。中浜以外では青年会がある地区もあった。

親友会が神楽を再び舞うようになり、青年会にかかわって保存会となった。神楽を継承し、大会に参加するようになった。親友会のなかには、「神楽部」「音楽部」「演劇部」などがあった。弁論大会などもやった。月1回ぐらい集まって俳句を作る会もあった。この時の俳句の講師は、町史1巻にでてくるB氏である。ホゴコウハンという俳号だった。

親友会は、集会所の改築、街灯の設置、夜間時の防犯活動など、地区の問題を協議する町政懇談会にも参加した。親友会は全体で35人ほどが会員であり、その内30人ほどが活動に参加した。親友会は、長男が農業から離れていく時代の変わり目に結成された、考えが一步踏み込んだ新しい時代の組織であった。

民俗芸能の大会があり、親友会の神楽部は参加するようになった。この親友会の活動は元々は中浜公会堂でやっていたが、ぼろぼろになったので、現在まであった集会所に変わった。

神楽部は18から23/24才ぐらいの男性で構成。結婚すると出てこなくなった。上の世代から指導を受けた。個人の自宅にお邪魔して、教えを請うた。それぞれ個人で得意な演目を持っている。そこにいき、座敷で教えてもらった。年配者が若年層に指導するのは、青年会でも同様であった。

こうした活動は当時は楽しみだった。祭典の近く、2-3週間ぐらい前になると練習した。当時はテレビもなく、神楽をみるのがたのしみだった。こどもは一定の年代になるまで神楽の練習はやらないが、演舞の一部を目で見て覚えていた。

神楽の演目

中浜神楽は12の演目があったが、このうちの11の演目を引き継いでやっていた。

- (1) 剣舞：矛の剣のおどり（2人）
- (2) 八幡舞：弓をもっておどる（2人）
- (3) 幣束舞【ヘイソクマイ】：幣束をもって踊る（2人）
- (4) 鯛釣り舞（別名：恵比寿舞）：つり竿をもって鯛を釣り上げる仕草をする（1人）
- (5) 種まき舞：農業の種まきの仕草を舞う（1人）
- (6) 一本剣【ツルギ】（別名、天狗舞）：天狗の仮面をつけて刀をもって踊る（1人）
- (7) 二本剣（天狗舞）：(6)を2人でやる
- (8) 三本剣（天狗舞）：(6)を3人でやる
- (9) 獅子舞：ひょっとこ2人と獅子頭2人、ひょっとこが獅子をあやす（4人）
- (10) 嫁御舞【ヨメゴマイ】：巫女の姿をした人に後ろから狐がばかす。これが滑稽でおもしろかった。巫女舞は嫁の姿をしている。
- (11) 四方固め：1人で獅子頭をかぶり、四方を清めていくという踊り
- (12) 春日舞（遠刈田舞）：剣舞の邪魔をする鬼を天狗が退治する舞である。春日舞を教えるときに、「遠刈田の山から鬼が出てきた」という話をするため、別称として遠刈田舞ともいう。2人が剣舞【ツルギマイ】をしていると、鬼2人が剣舞の邪魔をする。そこに天狗がでてきて鬼を退治する。

このうち、(8)の三本剣はやらなかった。

男性を中心に神楽部が舞っていた。管内の代表になり、(神楽の)県の大会に出たとき、(大会で)初めて女性が囃子を担当したことから、努力賞、特別賞を受賞した。

神楽の踊り手、囃子などの担当は、練習を重ねていく過程で自然と個人が選択して、決まっていく。踊りが苦手なため太鼓を担当し、笛の音が初めは出なかったが、吹いている内に上達して笛を担当するようになるなど、様々であった。話者は踊りと太鼓を担当した。4月の祭では、1人2役で最初の演舞に出た人を最後に出演するなどして、複数の役を担当していた。神楽に参加する人は明確に確認できていないが、話者曰く「10人ではきかない」ため、お囃子をいれると少なくとも十数人以上だと思われる。

祭典の時の神楽

神輿のある天神社は高台の山にあった。まずはカミサマを降ろして、神輿を降ろす。その時に奉納神楽をやった。このときには特に秘密ではなく誰でも見ることは可能だった。その後神輿を担いで中浜地区の集落を回った。生活センターや集会所の前にさしかかると、神輿を地面に下ろして神楽を舞う。中浜地区の住民、子どもやその親が見に来ていた。神楽は地区の人にとっての楽しみだった。

時間にすると、9時30分頃に神社に行き、10時30分に1時間かけて集落の中心部へ向かい、神輿を担いで町を周る。一通り町を回った後に、海の方へと神輿を運ぶ。その後、再び山へと神輿を戻し、カミサマを上に戻すまで、開始から3時間ほどかかる。神輿を車で運ぶ場合もあり、

そのときは通常より広い範囲を神輿が回る。

震災直前までの神楽の活動

保存会は小学校でも神楽を教えている。学校のクラブという形は取っていない。小学校で神楽を経験した人で保存会に携わっている人もいる。小学生男子の3～6年生を集めて、毎週数人に分けて特定の演目を教える。小学校での神楽の経験者は、中学生になると受験、高校になる受験と就職でなかなか神楽には関わらない。後継者作りに苦心している。

話者が25、26年以上前に小学校で教えた子ども達の中に、30代になって保存会に入る人もいる。当時、「大きくなったらやれよ」と声をかけていた子ども達が、8人ほど実際に神楽を舞っている。中学生には、経験者有志が青年文化祭に「子ども神楽」として参加していた。そのときは保存会と同様に神楽を習う。

話者は、現在指導者の立場にある。親友会結成当時のメンバーで今も保存会に関わっている人は少なくなってきた。

神楽で使用する道具は、地区によって継承されてきたもので、集会所で管理していた。神輿は天神社に保管してある。神輿を担ぐ人は、青年会から、親友会、地区全体の人へと変化してきている。

カグラヤド【神楽宿】

神楽の前の準備として、神楽の舞台を設置することはせず、ブルーシートを用意する程度であった。話者の前の世代ではワラを結んで作ったむしろを敷いていた。前の世代は神楽を舞う場所も現在と異なり、神楽の参加者宅の庭先を「カグラヤド」と呼び、そこに神輿を置いてから舞っていた。カグラヤドは毎年交代の回り番ではなく、「今度はあんたの番だよ」という具合に踊る場所を確保できる家が数年単位での交代していた。

天神神社と中浜地区

中浜地区の中心の神社で氏子は200戸ぐらいあった。天神社の氏子になっている人、天神社のお札をもらえる人は、中浜地区住民、その本家・分家に当たる人ではないか。天神社にはある経緯があって宮司が常駐していない。

4月3日の祭典は神輿と神楽。11月3日にも神社の祭典があったが、行事はなかった。4月の祭日は第一日曜日に決めていたが、稲を植えなくてはいけない人も少なくて来たため、平日に戻してもいいのではないかという意見もある。中浜地区では兼業農家が多く、農業の後継者が不足している。イチゴを栽培している農家の割合は全体数からすると少ない。中浜地区には齋藤姓、島田姓、作間姓、千尋姓が多い。笠野地区にも島田姓は多い。